

メーブルレター(57)

ハローウィンの週末

枯葉が街路に舞い、晩秋から冬に変わりつつあります。ハローウィンのお化けの出没の時期です。コロナ禍で、お化けもお家お化けになったのか、出没は控えめになりました。お化けにワクチン接種はないのでしょうか。キャンディーを貰いにあちこち訪問する子供達の姿もずっと少なくなったようです。お家キャンディーでしょうか。工夫を凝らした扮装姿の子供の叫び声が聞こえなくなり、メリハリのないハローウィンです。

こんな10月のどんずまりの金曜日、出かけたはずのドリトル先生が突然戻ってきました。

「ガレージからでられないんだ。家の周りの一角が鉄柵でブロックされているんだ。立っている警官に、ちょっとそこの鉄柵ずらせて。大事な用事だから車で出ないといけないんだ。」

と頼むと、警官は、

「タクシーで行って。」

「何なんだ、これは。」

「救助作業で亡くなった消防士の葬式がこの先のノートルダム教会であるのです。」

「なんてこった。一市民の僕が死んでも、同じようにしてくれるのかしら。」

苦笑して立ち去る警官。

この一角は、救助の犠牲者(たった一人)の葬式がとり行われるノートルダム教会まで大通りも小さな通路も駐車場の出入り口も全て封鎖されてしまっているのです。野次馬根性で鉄柵越しに見てみると、千人は軽く越える消防士と警官が集まっています。なくなった消防士へ敬意を表して教会まで行進するようです。ナタを手に持つ消防士が最前列に並んでいます。7年前の我が家の火災の時に、ドアを壊したのもこのナタだったとフラッシュバックに襲われます。

行進が始まりました。5台のパトカーが誘導していきます。続いて五頭の騎馬隊。

「綺麗な馬」

「カナダ産の馬だよ。たてがみを編んで整えたり脚にゲートルを巻いたり、整えるのが大変なんだ。」

と、ドリトル先生の仕事柄の説明がはいりました。

警官の美しい乗馬姿です。ここまでは美的に進んでいきます。この後、切れ目なく続く消防士や警官の隊列は、縦も横も人数もバラバラ。貴重な奪われた命への国家いや州いや町をあげての儀式なのに、これで良いのかしらと老婆心が起きます。

「どうせするなら、徹底して美的にきちんとやり終えればいいのに」

フランスの徴兵制度で徹底的に仕込まれた隊列行進を思い出しながらドリトル先生は、深いため息をついています。このイージーゴーイングが、カナダなのでしょう。

そうそう、役にたつ健康な馬を作り上げるために獣医学が発達し、馬と共に戦場を駆け抜け、征服を繰り返したナポレオンによってフランスに世界最初の獣医学校が設立されたそうです。戦場で勝つには健康な馬が必須条件だったそうです。と、こう話しながら、ドリトル先生はオ

ンラインで馬のひずめの手入れ講座をとっています。マダム田中ですか、マダム田中は馬を見たことはありますが、触ったことはありません。馬ズラは苦手です。

こんなハローウィンの週末、義理の長男の家に食事によばれました。孫娘へのお土産に手元にあった1000ピースのジグソーパズルを持って行き、マダム田中は孫娘と二人でジグソーパズルに、しばし興じました。思ったより難しく、必死で埋め合わせ始めたのですが 頭が壊れそうです。

「枠からやらないとだめだよ」

「はいはい。」

「図をみて色合わせしていくっていうのもありだし。」

「はいはい。」

「ほら、そこそこ。」

「いろいろとあるものなのね。むずかしい。」

そんなやりとりの中、何気なく親の離婚で傷ついていないか、新しいパートナーと暮らす父親、新しいパートナーと週末暮らす母親といつも自分の居場所があまりなく、不安定なのではないかと探りを入れてみると、

「クラスの友達、皆、親が離婚しているよ。」

「えーそんなに。」

「大した問題じゃないわよ。親の離婚なんて。どうでも良いことだわ、私には。人生ってこんなものなんじゃない。」

なんと達観した意見なのかと呆気にとられるマダム田中に7歳の孫娘はにこっと笑うと、

「ちょっと待ってて、義母さんが用事から帰って来たみたいだから、お帰りって挨拶してくる。」

「良い子だね。きちんと気がついて。」

父親の所であれ、母親の所であれ、自分の部屋があり、1週間おきに場所が変わるだけなのだ、そう、割り切っているようです。暮らしが安定している限りは、子供は落ち込まず、サーバイバルの方法をみつけていくものなかかもしれない、とマダム田中はまるでヴァーチャルなゲームの世界いるような落差の激しい感覚に襲われるのでした。